

『建礼門院右京大夫集』の構成に関連して

千葉 覚

一 はじめに

『建礼門院右京大夫集』は歌集でありながら日記的性格を多分に含む作品である。それはまず、歌の詞書にあたる散文の量や質によるところが大きい。この散文の在り方が歌と共に諸氏によって注目され研究されてきた。糸賀きみ江氏^(注1)は「和歌の前に記された散文の部分は標題でも説明でもなく、和歌と共に回想の記の一部分であり内容をなすものであって、両者の融合した形態において看られる作品」と作者の文芸意識は和歌の詠出ではなく、和歌と散文の融合した回想にあると述べられている。また久保田淳氏は^(注2)「普通の歌集と異なつて、散文の比重が相当大きいこと、散文が和歌と同等か、時には散文の方が和歌を凌駕する重みを持つている」と述べておられるが、この集の構成を見ていく上での基本的な見解であろう。

ここではこの見解を基にして、散文と和歌との関係をみながら、さらにこの集の構成・構想まで考えてみたい。それには諸氏の研究・卓見に拠るところが多く、そのためまた、屋上に屋を架す感みがあると思われるが一私見を述べていきたい。またここで掲げた集の本文は九州大学附属図書館蔵細川文庫本『建礼門院右京大夫集』を底本にして適宜本文を改訂した久保田淳氏校注・訳『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館)から引用している。

二 まず回想について

『建礼門院右京大夫集』(以下『右京大夫集』)はその序と跋に述べられているように回想の作品である。序に「その折々、ふと心に覚えしを、思ひ出らるるままに」、跋に「思ひ出でらるることどもを、少しづつ書き付けたるなり」と見えるように折々の感動や感慨を思い出されるまま回想し、記録したものである。その回想の時期や記録の時期は個々によつて異なるが総合的に構成されたのは編纂時といえるだろう。つまり定家から「書き置きたるものや」と要請があつた時と考えられる。この時構成や表記も含めてほぼ現存する形に近いものが出来上がったと考えてよいと思われる。また久保田氏が述べるように^(注3)悲痛な経験からかなり時間が経過した「後鳥羽院政の終り近い頃」と作者には全体を集大成する意図が既に内在していたと考えることもできよう。

人物表記を見ると、85番歌で「権亮維盛の上」が90番歌では「三位中将維盛の上」と維盛の極官で示し、そして95番歌の散文では維盛のことを「権亮」と表記している。それぞれ歌の主題が異なっているが、構成上このように近い位置に置かれているのにもかかわらず同一人物の表記が異なるのは、歌が詠まれた時期が異なるのはもちろんのことであるが、その異なる日々の記録を最終の編纂時にはそのまま利用しているからであろう。「少しづつ書き付けたるなり」と跋にみえる日々の備忘録は、編纂時に表記の修整や改訂を加えた

ものもあればそのまま利用した場合もあったと考えられる。

中納言であった宗盛に、作者が五節の時用いる挿櫛を所望した時の贈答歌がある。(59・60番)。その散文に「八島の大臣とかや、このごろ人は聞こゆる、その人の中納言と申ししころ」と回想の説がある。宗盛のことを「八島の大臣」と「このごろ人」は呼ぶということである。平家一門は、寿永二年七月に都落ちし、十月に八島(屋島)に行宮を造営したのでこの呼称が生まれたのであろう。そうするとこの「このごろ」は寿永二年十月からそれほど遠くない時期となる。『吾妻鏡』では寿永二年の翌々年、文治元年十二月十七日の記事に「屋島の前内府」の呼称が初めて見えるので(注4)やはり「このごろ」は『吾妻鏡』に記事に沿った頃と考えるのがよいと思われる。「このごろ」は決して最終の編纂時ではなく、ここも既に日々記録していたものをそのまま編纂時に利用したことになる。編纂時に修整したのもあれば、修整なしでそのまま取り入れて構成していったのも存在するのである。

さてその回想・追憶の書式であるが特にこれといった一つの方法があるわけではないが、右の宗盛との贈答歌にも見えたように「.:のころ」「.:のとき」「.:の日」といった表現で時季を述べたり、また具体的にそれらの表現がなくても、「小松の大臣の菊合をしたまひしに、人に代りて」の例のようにそれに近い形を取って何時という時季を示したりして回想するものが比較的多い。その際、回想の作品であるからには回想を示す助動詞「き・し・しか」を使用するのが基本であるが、場合によっては現在形で記す時もある。そのようにして前の歌や歌群と区別していくが、ただ同一主題なり連想なりで歌が連続することがあるのでその点を十分に配慮しなければならぬことは言うまでもない。特に散文が短く、簡潔に記さ

れている場合、どこまで同一主題で続くのかが問題になるであろう。「契りとかやは逃れがたくて、思ひのほかに物思はしきこと添ひて、さまざま思ひ乱れしころ」と資盛との恋が述べられる歌(61番歌)がある。それに続く歌と散文を示すと、

秋の暮れ、おましのあたりに鳴きしきりぎりすの、声なく
なりて、他には聞こゆるに、

62 床なるる枕の下をふり捨てて秋をば慕ふきりぎりすかな

常よりも思ふことあるころ、尾花が袖の露けきをながめ出
だしつづ、

63 露のおく尾花が袖をながむればたぐふ涙ぞやがてこぼるる

64 物思へ嘆けとなれるながめかな頼めぬ秋の夕暮れの空

秋の月明き夜、

65 名に高き二夜のほかも秋はただいつも磨ける月の色かな

たちばなを「三つ、人の」見よとてつかはしたりし返事に、

66 心ありて見つとはなしにたちばなのにはひをあやな袖にしめつる

掛け離れいくはあながちにつらき限りにしもあらねど、な

かなか目に近きは、またくやくしくも恨めしくも、さまざま思

ふこと多くて、年も返りて、いつしか春のけしきもうらやま

しう、鶯のおとづるるにも、

67 物思へば心の春も知らぬ身に何うぐひすの告げに来つらむ

68 とにかくに心をさらず思ふこともさてもと思へばさらにこそ思へ

失せにし兄人のために、阿弥陀経書くに

69 迷ふべき闇もやかねて晴れぬらむ書きおく文字の法の光に

とある。67番歌の散文は比較的長くなっているが、これは資盛と

の疎遠を悲しむものである。そう理解して間違いはない。だが、その前後の歌がどうもアンバランスな感じがし、不調和な印象を免れない。短く簡潔過ぎる散文の表記がその原因の一端になっている。どうもこの一連の歌は資盛との恋が主題になっている歌群と整合してよいのではないだろうか。まず62番歌においては糸賀氏が「奔放に振舞う資盛に対する、作者の恋心の動揺かもしれない。」(注5)と見ておられる。63・64番歌の「常よりも思ふことあるころ」とは資盛との恋の懊悩であり、そして65番歌は単に秋の冴え輝く月を詠んでいるのではなく前からの歌に整合させて、物思いに沈み、暗く翳み曇る心が裏に暗示していると見る。66番歌で橋を送ってきたのは、大倉比呂志氏も述べるように(注6)資盛と見るのが妥当である。そして69番歌であるが、散文の末尾が「：の場合も・：の時も」と訳せる並列の意も含む「：にも」で終えているのは前の67・68の歌群の散文の末尾と同じであること、さらに「まよひこしやみのうつつのなごり」と見ゆとは見えぬゆめもうらめし(『続後撰和歌集』・恋四・887・注7)という真昭法師の歌からも「迷うべき闇」は作者右京大夫自身の恋に悩む闇と解釈してもよいのではないだろうか。構成において簡潔な散文に注意しながら見ると、他にも同一主題で整合してみてもかまわないと思われる箇所がある。170・171・172・173・174番歌は西山に住んでいた頃の資盛への思いと見てよい。簡潔な散文おける前歌との関係は十分に配慮すべきであろう。

三 説明としての散文

糸賀氏が述べるように「両者の融合」をどうしても考えなければならぬ節はある。「融合」においての文学的価値を別にして、最低限必要な説明、いうならば詞書という実質的な面からも散文の存

在価値を考えなければならぬものがある。

贈答歌では両者に暗黙の事柄があつて、歌を表示するだけでは不明な点が出てくる。そこで贈答された事情を散文で説明する必要がある。藤原実宗との贈答の一節を挙げてみる。

頭中将実宗の、常に中宮の御方へ参りて、琵琶弾き、歌うたひ遊びて、時々、「琴弾け」など言はれしを、「ことざましにこそ」とのみ申して過ぎしに、ある折、文のやうにて、ただかく書きておこせられけり。

4 松風の響きも添へぬひとりことはさのみつれなき音をや尽くさむ返し

5 世の常の松風ならばいかにばかりあかぬ調べに音もかはさまし

実宗の歌ではあるが、「さのみつれなき」の「つれなき」という表現は散文の「『ことざましにこそ』とのみ申して過ぎしに」という作者の気の利いた返事を示す散文があつてこそ明確に判明する。当事者同士で理解できる歌のやりとりで、歌を示すだけでは歌の内容が十分に伝わらない場合が当然出てくるわけで、そこでこの散文が必要となってくる。この散文が書き加えられたのは回想時である。その回想時がこの集の編纂時か、それともずっと以前の時々の記録を意図した時なのか、また、その時々そのままなのか、編纂時に修正したのかは不明であるが、歌に詠まれた感動内容を明確にするためには必要な散文の解説である。歌のやりとりではまず歌が存在する。やりとりされた歌が主での中に事情を説明した散文が従う。贈答歌がよくみられるこの集では回想時の説明は必要なものであり主従関係を持った「融合」といえる。

贈答歌ではなく作者個人の感慨を詠出した歌においても似たようなものが存在する。思いがけず昔の父の筆跡を見つけた時の歌と散文が次のように記されている。

79 太皇太后宮より、おもしろき絵どもを、中宮の御方へ参らせさせたまへりし中に、昔ててのもとに人の手習ひしてとて、詞書かせし絵の交じりたる、いとあはれにて、めぐりきて見るにたもとを濡らすかな絵鳥にとめし水茎の跡

この歌の「水茎の跡」は散文の「昔ててのもとに人の手習ひしてとて、詞書かせし絵」として、

の解説があつてこそ、「たもとを濡らす」の理由が明確になるのである。歌そのものだけでは涙を流す理由が曖昧なものになってしまう。

資盛が無沙汰の時、

西山なる所に住みしころ、遥かなるほど、ことしげき身のいとまなさにことづけてや、久しく音もせず。枯れたる花のありしに、ふと、

168 とはれぬは幾日ぞとだに数へぬに花の姿ぞ知らせがほなる

この花は、十日余りがほどに見えしに、折りて持たりし枝を、簾に挿して出でにしなりけり。

169 あはれにもつらくも物ぞ思はるるのがれざりけるよよの契りに

とある。「西山なる所に住みしころ」とはつきりと回想であることを示す表現から始まっているが、この一節にある「とはれぬは」

の歌にみえる「花の姿」の内容は前後の散文から明確になるのである。どうしても「両者の融合」で見なければならぬ一節であり、回想時の作者はそのことが当然のごとく考えていたのであろう。

この集では、詠まれた事情の説明に曖昧さの残るのはあるが、感動内容まで曖昧にしておこうという意図は窺えない。感動内容を余すところなく表現していこうとするのが作者の意図するところである。この明確さという点でみるならば他にも散文を伴ってこそ明快に判明できる歌は存在する。このことはあくまでも回想という作者の基本的立場を踏まえて考えなければならぬ。前者の「めぐりきて」の歌の散文も後者の「とはれぬは」の歌の散文も回想を示す助動詞「き・し・しか」を使用した明らかな回想文である。その回想時はいつなのか断定はできないが、しかしこの散文が整備される以前にこれらの歌は存在していたはずである。やはり歌が主で散文は従の関係といえる。

四 指示語の使用

歌の曖昧性については指示語の使用についてもいえる。回想の始まりに見える歌に

高倉の院御位のころ、承安四年などいひし年にや、正月一日、中宮の御方へ、内の上、渡らせたまへりし、御引直衣の御姿、宮の御物の具召したりし御様などの、いつと申しながら、目もあやに見えさせたまひしを、物のとほりより見まらせて、心に思ひしこと、

2 雲の上にかかる月日の光見る身の契りさへうれしとぞ思ふ

とある。この歌の「かかる」の掛詞のもう一方の意味「斯かる」は、歌の中の「雲の上に懸かる」であろうが、具体的にはやはり散文の内容を受けての指示語であり、月日は中宮と御門の比喩であり、その、目も鮮やかに輝くほど美しく感じられた様子を指していることがわかる。回想の端緒になるこの歌が、散文を伴ってより深い感動を伝えているその手法はまさに「融合」であり、回想の主題を象徴している歌であるが故に興味深い一節である。この一節と呼応しているものに、建礼門院を大原に訪ねる一節がある。そこでも歌には同じ指示語が使用されている。

241 仰ぎ見し昔の雲の上の月かかる深山の影ぞかなしき

この歌の掛詞である「かかる」の「斯かる」も前にある散文から寂寞の感を禁じ得ない深山の様子が具体化され、懐旧の「かなしさ」も一層深まるものとなる。

清盛の邸宅西八条においての春の遊宴における歌にも指示語の使用が見られる。

95 かくまでのなさけ尽くさでおほかたに花と月とをただ見ましだに

平維盛と平経正そして作者も含めた女房達が満開の桜のもと、月夜に管弦の遊宴を催す。そこに御門の使いで参上した藤原隆房が加わり、帰り際、作者が隆房に贈った歌である。この歌にある「かくまで」は慣用的な使い方も取れようが、作者の意図は散文で詳述した内容を示すことにあると考えられる。

指示語を含む表現でも「いざさらば」とか「さもこそは」とか「さ

てもなほ」「さこそげに」「さてある身」などといった全く慣用化された表現の使用も見られるが、散文との兼ね合いを考えて具体性とか明解さを考察するのにはやはりこれらの表現は除くべきであろう。

資盛を思い遣る歌に

199 さることのありしかとだに思はじと思ひ消てども消たれざりけり

がある。歌そのものでも鑑賞できるものであるが、作者の意図はやはりそこにはない。この歌は平重衡とのやり取りに続いて見える歌であるが、この歌の「さること」「は」はこの歌の散文で明瞭になる。それは

いつも同じことをのみかへすがへす思ひて、「あはれあはれわが心に物を忘ればや」と、常は思ふがかひなければ

とある。資盛同様に思えという懸想めいた重衡の戯言があった折の、重衡と作者の贈答歌に続いて見えることから忘却を願う相手は資盛であり、歌にある「さること」の内容が資盛との恋を指している」と具体化される。

歌そのものに曖昧性が存在し、散文の詳述で具体化していくという点では前節で取り上げたものと同じである。ここでは指示語の使用から散文が主といえる。歌が従になることでの「融合」となる。久保田氏の言葉を借りるなら散文の「比重」が重いということになる。歌における指示語の使用は寿永以後の動乱や平氏滅亡を述べる節に多くみられる。

- 212 あはれさればこれはまことかなほもただ夢にやあらむとこそ覚ゆれ
- 213 朝夕に見なれ過ぐししその昔かかるべしとは思ひてもみず
- 216 かなしくもかかる憂き目をみ熊野の浦わの波に身を沈めける
- 223 なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢見ぬ人やいひけむ
- 225 ためしなきかかる別れになほとまる面影ばかり身に添ふぞ憂き
- 230 かばかりの思ひに堪へてつれもなくなほながらふる玉の緒も憂し
- 237 わが身もし春まであらば尋ね見む花もその世のことな忘れそ
- 239 定めなき世とはいへどもかくばかり憂きためしこそまたなかりけれ

慣用的なものや歌中から判断できるものを除いて右のような歌が確認できる。212番歌の「これ」は散文にある平家の人々の訃報を受けている。213番歌の「かかるべし」は虜囚になった重衡を受け、216番歌の「かかる憂き目」は歌中の「波に身を沈めける」を受けているとも見られるが、これまで散文中で述べられてきた動乱の中での一族の苦悩を指していると考えてもよい。223番歌の「かかる夢」とは散文にある資盛の訃報であり、225番歌の「かかる別れ」は胸が裂けるような悲しみであった資盛との死別を、230番歌の「かばかりの」は資盛の供養における悲痛の思いを、237番歌の「その世」とは資盛と花見をした存命中のこと、239番歌の「かくばかり」は平氏一族の悲報を何度も耳にしたことである。前にある散文があつてこそ具体化していく指示語である。散文と歌によって、資盛と別れた後の騒擾の世を送る作者の不安や驚愕や傷心の思いを述べていこうとしている。そこではやはり散文のほうが「比重」が重く、歌のほうが散文に従っている形になる。

五 歌物語と日記の作品

歌における指示語の使用について他の作品を見ていくと、『伊勢物語』の歌に指示語が散文(地の文)を受けるものは見あたらない。『大和物語』では次の一首が見られる。

- 228 かかるかの秋もかはらずにほひせばはるこひしてふながめせましや(百四十二段注。)

「かかるか」(かかる香)は前にある散文の「むめのはなを、りて、」から直接には「梅の香り」である。この段の話からするとこれは亡き実母の深い愛情の比喩であり、「秋」は継母を、「はる」は亡き実母を喻えていることが分かり、継母に育てられた不幸を嘆く女性の歌である。この歌の直前にある歌は「ありはてぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくなげかずもがな」でありこれは『古今集』卷十八・雑下・965にある平貞文の歌「ありはてぬ命まつまのほどはかりうき事しげくおもはずもかな(注9)」に近い歌であつて、この段はこの貞文の歌に近い古歌と継母の昔の物語を結びつけて語った歌語りになっている。このことから「かかるか」の歌は、その歌語りを行った人物が新たに創り上げた歌とも考えられるが、このような指示語の利用した歌はここに見えるだけである。このことから歌物語という作品と「右京大夫集」のこの指示語を多用している寿永以後の一連の構成は異質なものと見える。

日記作品をみると、まず『蜻蛉日記』には次のような歌が見られる。(注10)

- 32 などかかるなげきはしげさまさりつつ人のみかるるやどとなる

らん

157 ささがにのいまはとかぎるすぢにてもかくてはしばしたえじとぞ思ふ

162 なびくかなおもはぬかたにくれ竹のうきよのすゑはかくこそありけれ

174 身ひとつのかくなるたきを尋ねればさらにかへらぬ水もすみけり

『蜻蛉日記』の作者だけの歌を取り上げたが、歌物語に比べると数が多くなる。姉夫婦に贈った32番歌の「かかるなげき」は前の散文から、公然と町の小路の女のもとへ通う夫兼家との結婚に対する後悔の念、そして姉との離別の悲しみが含むものである。兼家の妹、貞観殿の御方(登子)に送った手紙に見られる157番歌の「かくては」の内容は手紙などを差し上げるなど交際を続けること。162番歌は兼家との結婚生活も憂愁の極に達し、山寺に籠ろうと何もかも味気なく思っていた頃の歌で、植えた呉竹が激しい東風で倒れかかっているのを見て「かくこそありけれ」と作者自身のみじめな姿をたとえ、またこの呉竹の向いている「おもはぬかた」(物思いのない、西方浄土。^{注11})の方向に惹かれるというのである。前にある散文から具体的になる。鳴滝に籠った作者を見舞いに来た親族との翌日の手紙の遣り取りの際の歌で、「かくなる」とはこれまで何度も苦悩を重ね、尋常ではない山籠りをするに至ったことを指す。親族の者の「いかでかくは。なにとなどせさせたまふにかあらむ。ことなることあらでは、いとびんなきわざなり」という作者の身を案じる言葉が「かくなる」という表現に結びついていく。贈答歌が多いこの作品で右の内三首が贈答歌であり、当然贈答歌であるがために暗黙の了解による曖昧さは現れてくるだろうが、歌に使用されている指示

語の曖昧さは散文の表記で明らかになっている。

『和泉式部日記』も贈答歌が多い作品であるが、ここにも次のような作者の歌が見られる。(注12)

11 またましもかばかりこそはあらましかおもひもかけぬけふのゆふぐれ

13 かかれどもおぼつかなくもおもほえずこれもむかしのさきこそあるらめ(注13)

67 我ならぬ人もさぞみんなが月のありあけの月にしかじあはれはしかばかりちぎりしものをさだめなきさはよのつねにおもひなせとや

11・13・133番歌は帥宮への歌であり、67番歌は暁起きの感慨を詠んだ歌である。11番歌の「かばかり」の解釈には諸説があるが、前にある散文の「御文やあらん、と思ふほどに、さもあらぬを」を受けている。宮様から「歌はおるかお手紙さえも頂けない」ということとなる(注14)。13番歌の「かかれども」は11番歌の「またましも」の歌を宮に差し上げたことであり、67番歌の「さぞ」は歌中の「なが月のありあけの月にしかじあはれは」であるが、その「あはれ」の具体的な中身は散文の「大空に、西へかたぶきたる月をの影遠く、すみわたりて見ゆるにきりたる空の気色、鐘の声、鳥の音一つに響きあひて、さらに、すぎにし方今行く末のことども、かかるをりはあらじと、袖のしづくさへあはれにめづらかなり。」といった幻想的で複雑な情緒をいつているのである。133番歌の「しかばかり」はこれまでの宮の愛情を指すが、「さは」は宮が話し出した慮外な出家のことである。

『蜻蛉日記』と同様に歌の指示語の内容が散文で具体化する歌が存在する。このような歌と散文の関係を見ると、『右京大夫集』の寿永以後の動乱を記した節の展開なり構成意識は、(また『右京大夫集』そのものといつてもよいと思うが)歌物語の作品より日記作品に近いものと考えられる。歌と散文がこのような「融合」を以て展開していく両者の緊密な関係は、歌物語とは異なるものである。他人が詠んだ歌をあくまでも中心に置き、その詠まれた状況や、または古歌の詠まれた状況に興味を抱いて物語を創作したりまた話したり、昔話と結合させたりして一つの世界・宇宙を創り出していることとする冷静で客観的な性格を持つ歌物語の作品とは異質なものである。『右京大夫集』の作者は自らの体験を語るのに自らの存在から距離を置いて、冷静な目で見ていこうという意識はそれほどなかったのではないかと思われる。愛し愛された人、親交のあった人、折々の感動や苦悩や悲しみを、自らの生の証として感じたまま素直に描こうと思ったのではないだろうか。全体の構想・構成は生の証のためのもので、物語ることによって他人に興味を抱かせるような作品ではないと思われる。

六 歌人としての作者

作者は歌人としての意識を強く抱いているはずである。この作品においても「日記」とは述べていない。序に、へりくだった言い方をして「家の集」という表現を使っている。それは歌集という存在を強く意識し、歌人でありたいという真情を吐露しているものがある。歌人としての自負心があれば歌そのものへの拘泥りはあるはずである。俊成の九十の賀の際も、下賜されるものとしての宮内卿の歌の曖昧さを指摘している。歌そのものが自立し得る完成度を高

めたいという思いは常に抱いているはずである。そうするといままで述べてきた歌そのものの「曖昧」な面は歌と散文の「融合」というこの集の目的には適っていても歌人の意識を満足させるものではないはずである。

少し後代の話になるが、作者右京大夫の推定されている年齢よりも約五十年ほど後(注15)に権中納言実材卿母と呼ばれる女流歌人がいる。その歌集『権中納言実材母集』(書陵部蔵の孤本・上下二冊)の上冊に、日々の詠歌に挟まれて七十八首(『新編国歌大観』77番歌(154番歌)の部類歌が見える。春・夏・秋・冬・恋・雑の部立て、それぞれ春二十首、夏九首、秋十二首、冬七首、恋九首、雑二十一首の構成になっており、いうならば百首歌に近い形を採って日常生活の詠歌、贈答歌を含めた部類歌である。ここには普段の詠歌を取捨選択し精選していこうという意識が窺える。さらに同集では上冊の末尾には百首歌(295番歌(394番歌)が置かれている。部類歌から百首歌への展開は考えられるが、その逆は考えられない。精選からより精選されたもの、または彫琢されたものへの希求が感じ取られる。その精選の目的は、部類歌の149番歌の詞書きの「おりおりかきあつめて侍りし物ともを、弁内侍との、もとへつかはしたりしかは、かくよみてをこせられて侍りし」とか下冊836番歌の「むかしの歌かきあつめてつかはして侍りしかは、九条二品」の詞書きから歌人として高名(九条二品は歌道家六条家の子孫藤原隆博)を得ている人への贈呈のためとみられ、当然歌の精選または推敲を重ねての、彫琢が必要となるだろう。歌の完成度を高めなければならぬ。

この『右京大夫集』においても、跋に「おのづから人の『さることや』と言ふには、いたく思ふままのことかはゆく覚えて、少々をぞ書きて見せし。」と人に自己の歌をまとめて贈っているので、そ

のために精選といえる和歌活動があつてしかるべきであろうが、この『右京大夫集』にはそのような活動の認められる歌または歌群が見受けられない。しかしその精選されたものはこの集とは別に存在したと考えてよいと思われる。「少々」とあるので定数歌と定まったものではないにせよ、『実材母集』に見える部類歌のような精選されたものが他に存在したと考える。つまりこの『右京大夫集』は本来そのような目的を持ったものではなく散文と歌の調和によるあくまでも回想を主として構成された抒情詩なのであろう。その構想を最終的に採ったのはやはり定家から「書き置きたる物や」と要請があつた時であろう。藤平春男氏が「晩年の定家はしきりに過去を回想し、彼岸を想うという態度を示すが、前者から規範的古典主義の傾向が、後者からは人生的詠嘆の抒情歌への関心が現われるのであつて、相模以下の女流歌人達の進出、武家歌人や明恵の参加、または家隆・俊成女等の歌の選び方などにもそのような人生詠嘆の述懐的な作品を数多く認めることができる。」(注16)と『新勅撰集』撰集時代の定家の歌に対する態度を述べているのを考慮するならば、定家が作者右京大夫に要請したのは「人生詠嘆の述懐的な作品」であり、それに応えたのが現存する『右京大夫集』なのであるとも考えられる。因みに定家が『新勅撰集』に選んだのは、次の二首である。

題しらず

八四二 わすれじのちぎりたがはぬ世なりせばたのみやせましきみ

がひとこと (『右京大夫集』198番歌)

高倉院御時、ふぢつぽのもみぢゆかしきよし申しける人
に、むすびたるもみぢをつかはしける

一〇九八 ふく風も枝にのどけきみよなればちらぬもみぢのいろを
こそ見れ (同じく112番歌)

前の歌(恋歌三)は平重衡との贈答歌の一首だが、「題しらず」で入集する。重衡との経緯は記されていないが、もともと右京大夫が提出したのものにはそれが無かつたのか、また定家が省略したのかよく分からないが、もう一首、後の歌には『右京大夫集』にある経緯が採られているので定家の省略と見るのがよいだろう。『新勅撰集』では資盛が「前右近中将資盛」の名で、忠度が「平忠度朝臣」でそれぞれ一首ずつ入集しているので、関東を憚ったわけではない。つまり詞書きが無くても一首独立して鑑賞出来る歌と定家は見ていたのである。後の歌は「ちらぬもみぢ」の表現が詞書き無しではどうも不明になる。「むすびたるもみぢ」の現代の解釈に違いはあるが、『右京大夫集』にある散文を採って詞書きにしている。つまり散文と歌の「融合」したもののからの採録である。

七 終わりに再び指示語について

指示語からこの集の特色や構成に関することを述べてきたが、最後にもう一度指示語を取り上げる。まず資盛と藤原隆信のことが交錯して登場して『隆信集』にも見える140番歌の散文に、隆信が「この思ひの外なることを、はやいとよう聞きけり。」とある。「この思ひの外なること」は資盛との恋を指すもので、この「こ」という指示語の表現から考えるに資盛と隆信の恋は同時進行であることを示している。同時進行については既に諸氏の研究が指摘することであり何ら問題はないが(注17)、作者が最終的に構成した時には同時進行で構成する意図が明確に存在したことになる。ここでは取り上げ

ないが、どのように資盛と隆信を交錯させているのが問題となる。

(注18)

続いて七夕歌群五十一首であるが、(最後の322番歌「いつまでか七の歌を書きつけむ知らばや告げよ天の彦星」はこの歌群のあとがき・跋のようなもので、それを除くと五十首の定数歌にはなる)ここには諸氏が述べるように資盛との恋を投影させて詠んでいる歌が存在している。そしてこのなかにも指示語が使用されている歌が見えるのである。

- 309 七夕に心は貸して嘆くともかかる思ひをえしも語らぬ
 313 よし貸さじかかる憂き身の衣手はたなばたつめに忌まれもぞする
 321 よしやまた慰めかはせ七夕よかかる思ひにまよふ心を

つまりこの三首も「融合」で見えていかなければならないのである。今度は散文ではなくその前にある歌ということになる。309番歌と321番歌両首ともに「かかる思ひ」であり、313番歌は「かかる憂き身」であり、全部資盛の投影されている歌を受けている。309番歌の「かかる思ひ」は直接には上の句を受けるのであるがその前にある二首によって具体化する。それは次の歌になる。

- 307 七夕の逢ひ見る宵の秋風に物思ふ袖の露払はなむ
 308 秋ごとに別れしころと思ひ出づる心のうちを星は見るらむ

この二首以前にも資盛が投影されている歌は存在し死別の前なのか後なのか判別しにくいものもある。309番歌の「かかる思ひ」は主にこの二首を受け、「秋ごとに別れしころ」と平家が都落ちした後

の資盛との離別による苦悩とみてもよいし、また死別後の苦悩と採ることも可能であろう。「二星はあの辛い別れをあわれんでくれるだろうが」織女星とは比較にならない深い苦しみは到底語ることはできない。」ということになる。そしてこの309番の歌から最後まで313番歌も含めてほぼ資盛が投影されている歌である。それも313番歌の「かかる憂き身」「忌まれもぞする」という表現とか317番歌の「嘆きても逢ふ瀬を頼む天の河このわたりこそかなしかりけれ」と自分には全く資盛との逢瀬を期待できないということから資盛との死別後の悲痛な苦しみを詠んでいると見てよい。七夕に寄せての述懐歌といってもよいこれらの歌を受けているのが五〇番目の歌である321番歌の「かかる思ひ」である。これらを「融合」させてこの一群の歌を見ていかなければならないということになる。それは

- 310 世の中は見しにもあらずなりぬるに面変りせぬ星合の空
 315 何となく夜半のあはれに袖濡れてながめぞかぬる星合の空
 313 (前掲) して深い悲しみを抱き苦しむ自分がいる。

- 320 たぐひなき嘆きに沈む人ぞとてこの言の葉を星やいとほむ
 その悲しみを、つい二星に訴えてしまう。掛け替えのない人との死別の苦しみは、口外することなく自分一人で背負っていかなければならない。それは十分に了解している。

- 318 書きつけばなほもつつまし思ひ嘆く心の内を星よ知らなむ
 321 (前掲) それでもやはり二星だけは私の支えでありこの苦しみを理解してくれるだろう、といった心情であろう。ともかくここにも構成意識

が窺うことができる。ただそれはあくまでも自分を物語るものではなく、生きた証としての真情を吐露するためのものと考ええる。

1と同書が参考になる。

(注1) 『建礼門院右京大夫集』の日記文学的性格」(女流日記文学講座 第六卷『建礼門院右京大夫集：うたたね・竹むきが記』勉誠社 平成二年十月十三日)

(注2) 『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集』とはすがたり」(小学館)解説。

(注3) (注2)と同

(注4) 『全譯 吾妻鏡 第一卷』(貴志正造・訳注 新人物往來社)に拠る。猶、寿永二年の翌年元暦元年六月一日の条にも「直に屋嶋の前内府に參ずと云々」とあるが、「屋嶋」は人物名の一部ではなく、地名(場所)のものであるろう。

(注5) 『新潮日本古典集成 建礼門院右京大夫集』頭注(糸賀きみ江氏校注)

(注6) 『建礼門院右京大夫集』の構想と執筆意図」(注1と同書)

(注7) 『新編国歌大観』第一卷に拠る。

(注8) 『新編国歌大観』第五卷に拠る。

(注9) 『新編国歌大観』第一卷に拠る。以下勅撰集の歌は『新編国歌大観』に拠る。

(注10) 『新編国歌大観』第五卷に拠る。

(注11) 『完訳 日本の古典11・蜻蛉日記』(小学館)の解釈に拠る。

(注12) 『新編国歌大観』第五卷に拠る。

(注13) 五句目「さき」は異本では「えに」となっている。

(注14) 『新潮日本古典集成 和泉式部日記 和泉式部集』(野村精一校注)の解釈に拠る。

(注15) 井上宗雄氏の推定年齢に拠る。「藤原政範集を紹介し実材聊母集等との関係に及ぶ」(『国文学研究』69集・昭54)

(注16) 『新古今歌風の形成』(昭44)

(注17) 論文に本位田重美氏の「右京大夫集 二つの恋」(『国文学解釈と教材の研究』第24巻10号・昭54・8月号)がある。

(注18) 今関敏子氏の「論考『建礼門院右京大夫集』における愛と死―資盛と隆信をめぐって―」(注

